

二〇一七年度 卒業論文

現生正定聚の一考察

コピー 一 廠禁

L140044

栗田 弘智

目次

序論	1
本論	3
第一章 現生正定聚とは	3
第一節 正定聚の変遷	3
第二節 臨終来迎の否定	6
第三節 現生正定聚について	8
第一項 三定聚	8
第二項 「現生」の根拠	9
第三項 たまわりたる信心	10
第四節 弥勒と同じ・如来と等し	11
第二章 現生正定聚の確立	14
第一節 現生正定聚の源泉	14
第二節 第十一願について	15
第三節 『往生論註』の引文	17

禁 廠 一 七 三

# コピー— 厳禁

参考文献	
註	
結論	24
第二節 今のよろこび	20
第一節 未来のよろこび	18
第三章 現生正定聚のよろこび	18

## 序論

親鸞（一一七三～一二六二）は、『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』）の「信巻」において次のように述べている。

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。なにもものか十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讃の益、六つには心光常護の益、七つには心多歡喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり。<sup>1</sup>

五趣とは五悪趣のことであり、衆生が自分の業によって赴くところで、地獄・餓鬼・畜生・人・天の五つの世界のことを指す。八難とは、仏をみるできない、もしくは仏法を聞くことができない難処のことである。具体的には、地獄、餓鬼、畜生の三悪道という三種類の苦しみの世界と、長寿天、辺地という楽しみの多い二種類の世界と、感覚器官に欠陥があり仏法の聞けない体のもの、世知に長けて邪見に堕ちたもの、仏の出現に会えないものの三種類を加えたものである。信心を獲得したならば、他力のはたらきによって、このような五趣・八難の道を超えて、この現生において十種の利益を得ることができると示される。<sup>2</sup>一つには、凡夫の目では見ることができない諸天善神に護られる冥衆護持の益。二つには、この上もなく尊い名号の功德が具わる至徳具足の益。三つには、悪が消滅することなく善に転じられていく転悪成善の益。四つには、十方の諸仏に護念される諸仏護念の益。五つには、諸仏に称讃される諸仏称讃の益。六つには、常に阿弥陀仏の心光につつまれて護られる心光

常護の益。七つには、心に法のよろこびが多いという心多歡喜の益。八つには、阿弥陀仏の恩を知って、阿弥陀仏の徳に報ずる生活をするという知恩報徳の益。九つには、常に阿弥陀仏の大悲を弘める徳をいただく常行大悲の益。十には、信心を得たものは即時に仏に成ることの定まった位に入る入正定聚の益である。この現生十益は、入正定聚の益、すなわち現生正定聚を総益、他を別益とする、親鸞思想の大きな特徴のひとつともいえる現生正定聚について具体的に説いたものである。

親鸞は『一念多念文意』の左訓において、正定聚について、「かならず仏になるべき身となれるとなり。」と述べている。すなわち正定聚とは、必ず成仏することに定まった仲間という意味である。また、「現生」とは、いわゆるこの世のことである。すなわち、信心の行者が現生において必ず往生成仏することが定まった仲間に入ることを「現生正定聚」とよんでいる。「現生」において正定聚に住するという点こそ、親鸞思想の大きな特徴である。

本論文は、現生正定聚とは何かを研究することを目的としたものである。現生正定聚とは具体的にどのような利益であるのか。また、現生正定聚が成立した根拠には何があるのか。そして、親鸞の現生正定聚のよろこびとはどのようなものであるだろうか。これらの疑問を、親鸞の著述などを辿りながら検討していくこととする。

## 本論

### 第一章 現生正定聚とは

#### 第一節 正定聚の変遷

親鸞の現生正定聚について考察する前に、親鸞に至るまで正定聚がどのように捉えられていたか、その変遷を確認しておきたい。

七高僧の第四祖である道綽（五六二〜六四五）は、仏教の出離生死の道について次のように述べている。

答へていはく、大乘の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。<sup>4</sup>

道綽は、この世においての成仏を目指す「聖道門」と、阿弥陀仏の浄土において成仏を目指す「浄土門」の二つの道があることを示した。本来仏教は、釈尊のように現生において成仏を目指す聖道の教えであった。正定聚は必ずさとりをひらいて仏になることに決定した仲間という意味であるから、当然聖道門において正定聚は、現生において得ることができると利益であった。しかし、道綽はこの世での成仏を目指すことは難しいと聖道の難証を示した。

その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖（釈尊）を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。このゆゑに『大集月蔵経』（意）にのたまはく、「わが末法の時のうちに、億々の衆生、行を起し道を修すれども、いまだ一人として得るものあらず」と。<sup>5</sup>

聖道の教えを修めることが難しい理由を二つ挙げている。一つは、釈尊の入滅からはるか遠く時代を経てしまっていることであり、もう一つは、聖道門の教えは深いけれども、衆生の理解力が劣っていることである。そして、聖道の難証が『大集月蔵経』の文によって証明されたと述べている。そして、道綽は「当今は末法にして、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。」と述べている。今は末法の時代であり、五濁悪世であるから、さとりをひらいて仏となる道は浄土門の教えしかないことを述べ、往生浄土の道を勧めたのである。道綽は末法思想の影響を強く受けている。末法思想とは、釈尊の入滅後次第に仏法が衰退していくという思想である。仏教の衰退の程度によって、正法、像法、末法に分類される。末法に入るまでの年数は一定ではないが、道綽は正法五百年、像法千年、末法一万年説に依り、釈尊入滅後千五百年が過ぎ末法の時代に入ったと考えていたとされる。道綽在世当時の中国は、目まぐるしく政権が交替する戦乱期であるとともに、北周の武帝による仏教弾圧が行われるなど激動の時代であった。このような時代背景を考えれば、道綽が自分の生きた時代を末法としたこと、そして現生において成仏することは困難であり、浄土に往生し成仏するという道しかないと考えたこともうなずけるであろう。<sup>7</sup>

ここで注意しなければならないのが、本来浄土教では、浄土に往生してすぐに成仏するわけではなかったということである。浄土に往生した後は、さとりをひらいて仏となることを目指すため、浄土において修行する必要があった。よって、成仏することに定まった正定聚の位につくのは、浄土往生後ということになる。すなわち、聖道門においては現生に得ることができた正定聚の利益は、浄土門においては浄土往生後に得ることが

きる利益になったのである。

そして、日本にも仏教が伝わったが、その日本では、平安末期頃に浄土教が盛んになった。この平安末期は、飢饉や疫病が流行し、貴族社会が衰退するとともに武家が力を持つようになり、戦乱が激化するなど、非常に混乱を深めていた時代であった。そのような時代背景の中、盛んになった親鸞以前の浄土教においては、『仏説観無量寿経』（以下、『観経』）を中心に臨終来迎の思想が重視された。すなわち、臨終に阿弥陀仏が諸仏とともに念仏者の元に来迎し、阿弥陀仏と共に浄土へ往くことが期待されたのである。

下品下生といふは、あるいは衆生ありて不善業たる五逆・十悪を作り、もろもろの不善を具せん。かくのごときの愚人、悪業をもつてのゆゑに悪道に墮し、多劫を経歴して苦を受くること窮まりなかるべし。かくのごときの愚人、命終らんとするときに臨みて、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説き、教へて念仏せしむるに遇はん。この人、苦に逼められて念仏するに違あらず。善友、告げていはく、へなんぢもし念ずるあたはずは、まさに無量寿仏〔の名〕を称すべし」と。

五逆・十悪を作り続けた生涯の報いとして、迷いの世界である五逆趣・六道に墮ちるはずの衆生にとって、阿弥陀仏の来迎によって、悪道に墮さずに浄土に往生できるという教えは、ありがたく尊いものであった。臨終来迎という考え方は、親鸞在世当時の最も頼もしく、ありがたい臨終のあり方として注目されていたのである。しかしながら、臨終来迎の考え方においても、浄土に往生した後すぐに成仏できるわけではなく、修行をして成仏を目指す必要があった。すなわち、臨終来迎においても正定聚は浄土往生後の利益とされていたのである。



## 第二節 臨終来迎の否定

しかし、親鸞は、眞実信心を得たならば現生において正定聚の利益を得ることができると示したのである。親鸞は、『教行信証』「証卷」において、

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。<sup>10</sup>  
と述べている。この文について星野元豊氏は、

迷いに迷っている罪濁にまみれた泥凡夫も如来より回向された浄土往生の信心をうれば、即座にその時に大乘正定聚の数に入るのである。(中略)このように必ず往生して仏のさとりをひらくにきまった位である正定聚の位だったのであるから、必ず浄土に往生して滅度のさとりをひらくことができるのである。<sup>10</sup>

と解釈されている。すなわち、煩惱具足の凡夫であっても、阿弥陀仏より回向された眞実信心を得たならば、現生において正定聚の位に住することができ、浄土に往生したならば修行をする必要はなく、即座に成仏できるところを示したのである。親鸞は浄土教においては浄土往生後の利益になっていた正定聚を、その浄土教においても現生に得ることができると示したのである。

現生において正定聚に住するということは、臨終の良し悪しは問われないということである。すなわち、現生正定聚は、臨終来迎の否定とともに成立するものである。<sup>11</sup>親鸞は、『親鸞聖人御消息』(以下、『御消息』)の第

一通において、次のように述べている。

来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑに。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし、いまだ真実の信心をえざるがゆゑなり。また十悪・五逆の罪人のはじめて善知識にあうて、すすめらるるときにいふことなり。真実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則をまたず。<sup>12</sup>

まず、臨終来迎を問題とするのは、諸々の善行を積んで浄土に往生することを願う自力往生の人であると述べ、臨終来迎を問題とする理由は、真実信心を得ていないからだ<sup>1</sup>と示している。一方、真実信心を得た者は、現生において即座に往生成仏が決定した正定聚の位に入るのだから、臨終を待つことも、仏の来迎を待つことも必要ないと示している。<sup>13</sup>

そもそも、臨終来迎を期待する自力往生にはいくつか問題点が挙げられる。例えば、臨終まで往生成仏できるかどうかかわからないという点において、心が定まらず、日々不安な日々を送ることになる。また臨終時には、心を穏やかにして仏の来迎を待つ必要があるが、これは非常に困難なことである。一方、親鸞の示した現生正定聚においては、現生において往生成仏が定まるのであるから、往生できるか否かといったことで心を煩わされることはない。また、臨終の良し悪しは問われず、たとえ臨終が穏やかなものでなかったとしても、浄土に往生し成仏できることに変わりないのである。浄土に往生するためには、臨終において仏の来迎を穏やかな心で迎えなければならぬと考えていた当時の人々にとって、現生正定聚は非常に画期的な教えであっただろう。

### 第三節 現生正定聚について

#### 第一項 三定聚

そもそも「正定聚」とは、三定聚の一つである。正定聚の他には、邪定聚と不定聚がある。「浄土和讃」には、その三定聚について詠った和讃がある。

安楽国をねがふひと 正定聚にこそ住すなれ

邪定・不定聚くになし 諸仏讃嘆したまへり<sup>14</sup>

阿弥陀仏の本願を信じ、浄土に往生することを願う人は、現生において正定聚に住することができるが、邪定聚や不定聚の人は浄土に往生していないこと、そして名号のはたらきを十方の諸仏が称讃していることを述べた和讃である。邪定聚とは、『仏説無量寿経』（以下、『大経』）に説かれる阿弥陀仏の第十九願<sup>15</sup>の行者をいい、念仏以外の行を修め、その功德を回向して往生しようとする人のことである。このような行者は、真実の浄土に往生できないことが決まっているので邪定聚という。不定聚とは、第二十願<sup>16</sup>の行者をいい、自力念仏を振り向けて浄土往生を願う人である。このような行者は、念仏しながら疑いの心がなくならず、真実の浄土への往生が定まらないので不定聚という。一方で正定聚とは、第十八願の行者のことであり、真実の浄土への往生が正しく定まった人々のことである。親鸞は、阿弥陀仏の本願を聞信し、真実信心を得た人は、現生において仏と成ることが定まった正定聚の位につくことができることを示したのである。<sup>17</sup>

禁  
廠

## 第二項 「現生」の根拠

なぜ親鸞は、正定聚を現生で語ったのであろうか。なぜ眞実信心を得たならば、現生において正定聚が決定するのであろうか。その理由は、大きく二つあると考えられる。

一つは、眞実信心を得た人は、阿弥陀仏の救いの光の中に摂め取られ、決して捨てられないということがないという摂取不捨の利益にあずかるからである。『一念多念文意』では、次のように述べられている。

眞実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御ころのうちに摂取して捨てたまはざるなり。摂はをさめたまふ、取はむかへとると申すなり。をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、正定聚<sup>1</sup>の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり<sup>1</sup>。

これは、第十八願成就文の「即得往生」について解釈したものである。眞実信心を得たならば、ただちに正定聚の位につき定まると述べて、現生正定聚を説いているのであるが、その根拠として、「摂取して捨てたまはざるなり」と摂取不捨を挙げている。また先に掲げた『御消息』にも、「眞実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。<sup>20</sup>」とあり、親鸞が摂取不捨の利益を現生正定聚の根拠として考えていたことがわかる。そもそも摂取不捨とはどのようなはたらきであろうか。それは「浄土和讃」の、

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし

摂取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる<sup>21</sup>

の「撰取して」の左訓において、「撰めとる。ひとたびとりて永く捨てぬなり。撰はものの逃ぐるを追はへとるなり。撰はをさめとる、取は迎へとる<sup>22</sup>」と述べられているように、背を向けて逃げていこうとする衆生までも決して逃がすことなく撰め取るような阿弥陀仏のはたらきである。そのような阿弥陀仏の撰取不捨の利益を受けて、必ず浄土に往生し成仏できることから、眞実信心を得たならば現生正定聚が決定するのである。

もう一つは、眞実信心には成仏に必要なものがすべてそろっているからである。親鸞は名号について、『浄土文類聚鈔』において、「万行円備の嘉号<sup>23</sup>」と述べている。内藤知康氏は、

名号南無阿弥陀仏は「万徳の帰するところ<sup>24</sup>」「万行円備」といわれるのですから、名号南無阿弥陀仏一つに成仏に必要なものがすべてそろっているということができるところでしょう。その名号という仏の力・はたらきを信心というかたちで受けるのですから、信心には成仏に必要なものがすべてそろっているということになります。<sup>25</sup>

と述べている。すなわち、眞実信心を得たならば、成仏に必要なものをすべて得ていることになるため、現生正定聚が決定するのである。<sup>26</sup>

### 第三項 たまわりたる信心

また親鸞は、眞実信心を得たならば、現生において正定聚に住すると示したわけであるが、そもそも眞実信心が消えることはないのかという根本的な問題も存在する。しかし、そのような疑問は不要である。なぜなら、眞

実信心は自分で起こすものではないからである。『歎異抄』後序に次のような文章がある。

源空が信心も、如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も、如来よりたまはらせたまひたる信心なり。

されば、ただ一つなり。<sup>27</sup>

これは、「信心一異の諍論」の一節である。親鸞が法然（一一三三〜一二一二）門下で励んでいたころ、門下ではまだまだ若手であった親鸞が、勢観房源智や念仏房念阿といった有力な弟子に対して、法然の信心も自分の信心も同じであると主張したことから始まった論争であった。引用したのは、法然の信心と親鸞の信心がはたして同じであるのかということに対する法然の言葉である。法然は、親鸞の信心も法然の信心も、阿弥陀仏からたまわったものであるから、全く同じ信心であると述べている。もし、信心が自分で起こすものであったならば、消えることも考えられるだろう。しかし、真実信心は阿弥陀仏からたまわるものであるから、決して消えることはないのである。

#### 第四節 弥勒と同じ・如来と等し

親鸞は、現生において正定聚に住した者をどのように見ていたのであろうか。以下、考察していく。『教行信証』「信巻」に次のような文章がある。

まことに知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし。

念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。<sup>28</sup>

この文章は、一般に「便同弥勒釈」と呼ばれている親鸞のご自釈である。親鸞は、正定聚に住している信心の行者について、弥勒菩薩と「同じ」であるということができると述べている。信心の行者は、正定聚に住しているとはいえ、煩惱具足の凡夫であることに変わりない。しかし、親鸞はその煩惱多き信心の行者と弥勒菩薩が「同じ」であると示しているのである。この「同じ」とは、一体どういうことであろうか。

弥勒菩薩とは、これから五十六億七千万年のち、人間界に出現して成仏し、釈尊と同じように仏法を説き、衆生を救済するために、現在は兜率天で修行中の菩薩である。菩薩には、修行の段階に応じて階級が存在する。その階級は、十信位・十住位・十行位・十廻向位・十地位・等覚位・妙覚位の五十二の階位に分かれている。弥勒菩薩は、菩薩の階位の五十一位にあたる等覚位に住している。仏のさとりである妙覚とほとんど等しい位であることから等覚位という。

それでは、ここで「便同弥勒釈」において述べていることを整理しながら、弥勒と「同じ」と示した親鸞の意図を考察する。釈尊が菩提樹の下で仏のさとりを得たように、弥勒菩薩も竜華樹の下で三回にわたって説法をし、多くの大衆を救済したとき、無上の仏のさとりをひらくことになると考えられている。一方で信心の行者は、すでに他力回向の信心を成就しているので、弥勒菩薩と同じように、臨終のその瞬間に、必ず最上の仏のさとりをひらくことになる。すなわち、信心の行者も弥勒菩薩と同じ等覚位に住していて、仏と成ることが決定したその位が同じであるということ、親鸞は弥勒菩薩と「同じ」と表現しているのである。

それだけではない。親鸞は、信心の行者は如来と「等しい」とも主張しているのだ。「浄土和讃」には、

信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまふ  
大信心は仏性なり 仏性すなはち如来なり<sup>29</sup>。  
という和讃があり、また『御消息』にも、

浄土の眞実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はすでに如来とひとしければ、如来とひとしと申すこともあるべしとしらせたまへ<sup>30</sup>。  
と述べている。親鸞は、正定聚に住した信心の行者について、彌勒菩薩と「同じ」と示されただけでなく、さとりを得た如来に「等しい」と讃えられているのである。

彌勒菩薩と「同じ」、如来と「等し」などと表現される信心の行者は、自身の往生成仏が決定している正定聚の身である。往生が決定した後の信心の行者の念仏は、自身のために称える念仏ではない。それでは、何のために称える念仏であるかという点、阿彌陀仏の教法に出遇っていない者を導くための念仏であり、利他行である。如来は衆生を救おうとする「利他」のみであるが、信心の行者は、臨終の一念に至るまで自分の往生へと向かう「往相」という「自利」の面を消すことはできない。親鸞が彌勒菩薩とは「同じ」と言われ、如来とは決して「同じ」とは言わず、「等しい」と表現した理由は、信心の行者が菩薩の地位にあることを示している。すなわち、信心の行者は、「自利」と「利他」の両面を持った菩薩であり、「利他」のみの如来とこの点において違いがあるため、親鸞は「等しい」と「同じ」を使い分けたと考えられる。<sup>31</sup>また、信心の行者は、如来と「等しい」と表現されるわけだが、一方で仏に背いて生きている側面があることを忘れてはならない。先ほども述べたが、正定聚の位



に住したとはいえ、臨終の一念に至るまで煩惱具足の凡夫であることには変わりはない。死後、浄土に往生してはじめてさとりを開いて仏と成るわけであり、そのことをふまえて如来と「等し」としか表現しなかったのである。

## 第二章 現生正定聚の確立

### 第一節 現生正定聚の源泉

現生正定聚は親鸞独自の見解であるが、經典や論釈に根拠を見出すことができる。決して親鸞の独断的なものではない。例えば、『大経』において、「もし衆生ありてこの経を聞くものは、無上道においてつひに退転せず。<sup>32</sup>」とある。経法を聞いた時点で迷いの世界に退転することがないと説かれており、現生正定聚の根拠となりうる。<sup>33</sup> また、『仏説阿弥陀経』には、

もし人ありて、すでに発願し、いま発願し、まさに発願して、阿弥陀仏国に生ぜん<sup>34</sup>と欲はんものは、このもろもろの人等、みな阿耨多羅三藐三菩提を退転せざることを得て、かの国土において、もしはすでに生れ、もしはいま生れ、もしはまさに生れん。このゆゑに舍利弗、もろもろの善男子・善女人、もし信あらんものは、まさに発願してかの国土に生るべし。<sup>34</sup>

とある。浄土に生まれたいと、すでに願ひ、または今願ひ、またはこれから願うなら、みなこの上ない仏のさと

戒禁廠

りの智慧に向かつて退転することのない位に至り、その浄土には、すでに生まれているか、または今生まれるか、またはこれから生まれると示されている。過去・現在・未来における往生者が語られているが、これから浄土に生まれるものが挙げられていることは、現生の不退転を示しているということができ、これも現生正定聚の根拠といえる。<sup>35</sup>

また龍樹（一五〇〜二五〇頃）は『十住毘婆沙論』『易行品』において、「人よくこの仏の無量力威徳を念ずれば、即時に必定に入る。<sup>36</sup>」と述べており、親鸞は『教行信証』に引用している。<sup>37</sup>龍樹は、阿弥陀仏の無量力威徳を信じるものは、ただちに不退転の位に至ることを示しており、これも現生正定聚の根拠となりうる。<sup>38</sup>親鸞は、この「易行品」の文を受けて、「正信心仏偈」において、「弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即のとき必定に入る。<sup>39</sup>」と述べ、阿弥陀仏の本願を信じれば、ただちに正定聚に入ると理解している。

## 第二節 第十一願について

また親鸞は、ときに經典や論釈を独特な読み方をするによって、現生となる根拠を説明している。

例えば、『大経』と『無量寿如来会』（以下、『如来会』）の第十一願成就文を『教行信証』『証卷』に取り上げている箇所においては、『如来会』の第十一願成就文を独特に読み替えている。まず『大経』の第十一願成就文であるが、白文は「其有衆生生彼国者皆悉住於正定之聚所以者何彼仏国中無諸邪聚及不定聚<sup>40</sup>。」となっており、「それ衆生ありて、かの国に生るれば、みなことごとく正定の聚に住す。ゆゑんはいかん。かの仏国のうちにはもろ

もろの邪聚および不定聚なければなり<sup>41</sup>」と読まれている。「それ衆生ありて、かの国に生るれば」とあることから、この読み方では、正定聚は浄土往生後の利益であると説かれていることになる。一方『如来会』の第十一願成就文は、白文は「彼国衆生若当生者皆悉究竟無上菩提涅槃処何以故若邪定聚及不定聚不能了知建立彼因故<sup>42</sup>」であるが、『教行信証』において以下のように書き下されている。

かの国の衆生、もしまさに生れんもの、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん。なにをもつてのゆゑに。もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑなり。

43

注目すべきは、「かの国の衆生、もしまさに生れんもの」という言葉である。『浄土真宗聖典全書Ⅰ』の訓点に従って読み下せば、「かの国の衆生、もしまさに生ずれば」と書き下され、すでに浄土に往生した衆生のことを指す。すなわち、『大経』と同じく、経文当面では、浄土の衆生のことを述べているのであるが、親鸞は「かの国の衆生、もしまさに生れんもの」と読み替えた。「まさに生れんもの」とは、まだ往生していない、浄土を願生している者のことである。すなわち、浄土に往生した衆生だけでなく、現生の念仏者も含めた表現に読み替えたのである。このように独特に読み替えることによって、信心の行者がこの世で正定聚に住することの根拠を『如来会』の本願成就文に求めたのである。<sup>44</sup>

また、親鸞は『一念多念文意』において、『大経』の第十一願成就文についても、「それ衆生あつて、かの国に生れんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。<sup>45</sup>」と独特な読みを施している。「生れんとするものは」

とあえて読むことで現生において正定聚を得ることができている。さらに、『大経』の第十一願についても、白文は「設我得仏国中人天不住定聚必至滅度者不取正覚<sup>46</sup>」であるが、『一念多念文意』では、「たとひわれ仏を得たらんに、国のうちの人天、定聚にも住して、かならず滅度に至らずは、仏に成らじ<sup>47</sup>」と読んでいる。ここで注目すべきは、「定聚にも住して」の「も」という助詞である。助詞「も」をあえてつけることによって、この願は浄土においての正定聚を誓った願ではなく、必ず滅度に至ることに願の中心があることを示している。<sup>48</sup>

### 第三節 『往生論註』の引文

曇鸞（四七六く五四二）の『往生論註』（以下、『論註』）に、「若人但聞彼国土清淨安樂剋念願生亦得往生即入正定聚<sup>49</sup>。」という文がある。この文は、「もし人、ただかの国土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生ぜんと願すれば、また往生を得て、すなはち正定聚に入る<sup>50</sup>。」と読まれるのが普通である。すなわち曇鸞は、心の底から浄土に生まれたいと願えば、往生することができ即座に正定聚に入ること述べている。曇鸞は、正定聚の位につくことは、浄土往生の後であると理解していることがわかる。しかし親鸞は、『教行信証』「証卷」においてこの文を引用しているが、「もし人ただかの国土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入る<sup>51</sup>。」とこの文もまた独特な読み方をしている。この読み方では、すでに浄土に往生したものでだけでなく、現生において往生を願うものも正定聚に住することになる。すなわち、親鸞

は、現生の信心の行者も正定聚に住するということを明らかにするために、このような独特な読み方をしたのである。この文章について『一念多念文意』において、

この文のころは、もしひと、ひとへにかの国の清浄安樂なるを聞きて、剋念して生れんと願ふひと、またすでに往生を得たるひと、すなはち正定聚に入るなり。<sup>52</sup>

と解釈している。ここでも、浄土に生まれている衆生だけでなく、この世の信心の行者も正定聚に住していることを示し、現生正定聚を説いている。<sup>53</sup>

親鸞は、經典や論釈を根拠にしながら、ときには經典や論釈の漢文を独特な読み方をするによって、現生正定聚の思想を確立していったのである。

### 第三章 現生正定聚のよろこび

#### 第一節 未来のよろこび

これまでの宗学において現生正定聚は、どのように説かれていたのであろうか。例えば、桐溪順忍氏は、著書『親鸞はなにを説いたか』において、現生正定聚を説明する箇所が次のように述べている。

これは将来の明るさ、未来の希望によって、**现实生活**が充実するという、**将来の優位性**のうえに、**现实生活**のあり方を説かれるものとして、**大いに注意**しなければならないものでありましょう。现实生活の明るさは、

現実そのものだけからくるものではなく、明日の明るい希望がいかに現実生活を明るくするかは、われわれのいつも経験するところでありましょう。<sup>54</sup>

これまで現生正定聚は、未来における往生成仏が決定したよろこびとして説かれることが多かった。詳しく言えば、現生正定聚は、未来において往生成仏できることによるよろこびや期待感、安心感が、現在を照らし充実したものとするという理解をされてきたのである。

確かに、親鸞の言葉には、未来の往生成仏が決定していることをよろこんでいたことがうかがえるものがある。例えば、親鸞は『一念多念文意』において、

「歎喜」といふは、「歎」は身をよろこばしむるなり、「喜」はこころによるこばしむるなり、うべきことをえてんずと、かねてさきよりよろこぶこころなり<sup>55</sup>

と述べている。親鸞はまず「歎喜」について、身と心をよろこばすことであると述べ、そして歎喜の内容について、死後必ず浄土に往生し成仏することを前もってよろこぶことであると示しているのである。このことをふまえて考えると、未来の往生成仏が決定したよろこびは、親鸞の現生正定聚のよろこびであったといえる。

死後のいのちの行方は浄土であるといった死後の理解を持つことで、死に対する不安が和らぎ、生きる力やよろこびにつながることは十分に考えられる。死後浄土に往生できるといのちの行方を見定められることは、とても意義のあることである。しかし、私は以前から次のような疑問を持っていた。それは、親鸞における現生正定聚のよろこびは、未来の往生成仏が決定したよろこびのみであったのだろうかということである。浄土真宗の救

いと、未来において浄土に往生し成仏できることを期するものであったのだろうか。以下、考察していく。

## 第二節 今のよろこび

私は、親鸞の現生正定聚のよろこびについて、未来の往生成仏が決定しているよろこびだけで理解してしまうのは不十分ではないかと考えている。なぜなら、親鸞のよろこびの言葉をたどっていくと、今ここにおいて阿弥陀の撰取不捨の利益にあずかっていることのよろこび、今ここにおいて阿弥陀仏に見守られ支えられているよろこびも語られているからである。

例えば、親鸞は『教行信証』「総序」において次のように述べている。

ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くとお慶び、獲るところを嘆ずるなりと。<sup>56</sup>

梯實圓氏は、この「慶ばしいかな」について、

積尊が『大無量寿経』に開示された阿弥陀仏の本願の御教えを、インド・中国・日本と三国にわたって伝承し、その奥義を顕彰された祖師がたの御教えに遇い、本願を信じ念仏する身にしていただいた深い仏縁を慶び、述べられたものである。<sup>57</sup>

と述べている。すなわち、インド・西域の聖典や中国・日本の祖師方の釈文に、遇うことが難しいのに遇うこと

ができたこと。そして、今ここにおいて摂取不捨の利益にあずかり、本願を信じ念仏する身に育てていただいていることをよろこんでいるのである。ここでの親鸞のよろこびは、未来において往生成仏できるよろこびではなく、今ここにおいて阿弥陀仏のはたらきを受けているよろこびである。他にも、『教行信証』「化身土巻」において、

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。<sup>5.8</sup>

と述べている。親鸞は、心を阿弥陀仏の本願の大地に樹立し、人の思いを超えた限りない本願の大海に、よろこびと悲しみの情念を流していることをよろこんでいる。すなわち、今ここにおいて阿弥陀仏の大地に根を張り、阿弥陀仏に見守られ支えられながら生きていくことをよろこんでいるのである。ここでのよろこびも、阿弥陀仏のはたらきをたった今受けているよろこびであり、未来の往生成仏が決定したよろこびではない。

また「浄土和讃」にある「現世利益和讃」では、ひたすら無量の諸仏、観音菩薩や勢至菩薩などに、今ここにおいて護られていることが述べられている。例えば、

南無阿弥陀仏をとなふれば 十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して よろこびまもりたまふなり<sup>5.9</sup>

という和讃がある。信心の行者は十方無量の諸仏に、百重にも千重にもとり囲まれて護られる利益が与えられることを述べている和讃であるが、ここでの親鸞の着眼点は、未来の往生成仏ではなく、今ここにおいて諸仏によ



って護られていることである。このような和讃を詠んでいることを考えても、親鸞の現生正定聚のよろこびが浄土に往生することが決定したよろこびだけではなく、今ここにおいて救われているよろこびがあることは明らかである。

さらに、『教行信証』「信巻」において、

まことに知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。<sup>60</sup>

と述べている。親鸞が真実信心を得ても煩惱の中にあることを悲歎している箇所であるが、ここで注目すべきは、「定聚の数に入ることを喜ばず」と「真証の証に近づくことを快しまざる」という言葉である。親鸞は、必ず成仏するという正定聚の位に入ることをよろこぶことができず、浄土のさとりに近づいていることを楽しいと思うこともできないと述べているのだ。浄土へ往生し成仏することを素直によろこべないというのが、親鸞の率直な心情であったのであろう。このことを考えると、ますます親鸞の現生正定聚のよろこびが未来の往生成仏が決定したよろこびだけではないといえるのではないだろうか。また、『歎異抄』第九条には、

久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてを  
はるときに、かの土へはまゐるべきなり。<sup>61</sup>

という文がある。これは、念仏しているけれども、踊躍するほどのよろこびの心がわきあがってこないことや、

一刻も早く浄土へ生まれたいという思いが起らないことはどういうわけかという、唯円の質問に対する親鸞の答への言葉の一節である。親鸞も唯円と同じく、安らかな浄土に心惹かれず、むしろ苦悩に満ちたこの迷いの世界を捨てることができないと述べている。ここでも、親鸞は浄土に往生することを期待するどころか、そのような心が起らないことを嘆いている。しかし、

よろこぶべきところをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのしくおぼゆるなり。(中略) いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのしく、往生は決定と存じ候へ。<sup>62</sup>

と親鸞は述べている。よろこぶべき阿弥陀仏の教法を聞いてもよろこべないのは煩惱のしわざだが、阿弥陀仏はこのような私たちであることをかねてから見通したうえで、煩惱具足の凡夫を救うと仰せなのだから、他力の悲願は、このような私たちのためであったと気づかされ、ますます頼もしく思われると述べている。また、急いで浄土に参りたいという心のない者を、阿弥陀仏はことに不憫に思っており、そのことを思うと、大悲の本願は頼もしく、この度の往生は決定であると思うべきであると述べている。すなわち、ここでの親鸞のよろこびとは、よろこぶべき教法さえ素直にによろこぶことができない煩惱具足の私を、必ず救うという阿弥陀仏の摂取不捨のほたらきの頼もしさをよろこんでいるのである。

以上のことをふまえて考えると、親鸞の現生正定聚のよろこびを、未来の往生成仏が決定したよろこびだけで

理解するのは不十分であり<sup>63</sup>、今ここにおいて阿弥陀仏の摂取不捨のはたらきを受けているという視点を必ず持つことが必要ではないだろうかといえることができる。

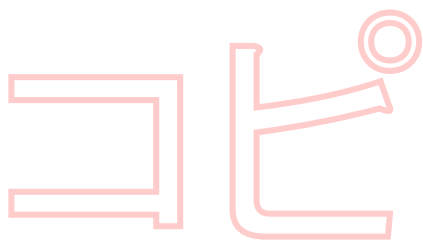
## 結論

これまで現生正定聚をさまざまな角度から考察し、現生正定聚とは何かということを述べてきた。

第一章においては、まず親鸞が浄土教においては浄土往生後の利益であった正定聚を、現生において得ることができる利益として示したことや、現生正定聚は臨終来迎の否定とともに成立するものであることを述べた。また現生において正定聚が決定する理由について、摂取不捨の利益にあずかっていることや、眞実信心には成仏に必要なものがすべてそろっていることを理由として述べた。また眞実信心は、阿弥陀仏からたまわるものであるから決して消えることはないことも述べた。最後に、親鸞が正定聚に住した信心の行者を弥勒と「同じ」、如来と「等しい」と表現し、讃えていることを述べた。また「同じ」と「等し」を使い分けている理由について、信心の行者は「自利」と「利他」の両面を持っているのに対し、如来が持っているのは「利他」のみであること、信心の行者は正定聚に住しているとはいえず、臨終の一念に至るまで煩惱具足の凡夫であることを理由として述べた。第二章においては、現生正定聚の根拠は何かを考察した。現生正定聚は、親鸞の独断的な見解ではなく、『大

嚴禁

経』、『小経』、『十住毘婆沙論』を例に挙げながら、経典や論釈に根拠があると述べた。また親鸞は、ときに経典や論釈の文を独特に読み替えながら、現生正定聚の思想を確立していったことも述べた。例として、『大経』や『如来会』の第十一願や第十一願成就文、『論註』の文を挙げた。そして第三章では、親鸞の現生正定聚のよろこびについて考察した。親鸞のよろこびの表現をたどりながら、親鸞の現生正定聚のよろこびが、未来の往生成仏が決定したよろこびだけでなく、今ここにおいて阿弥陀仏の撰取不捨の利益にあずかっているよろこびがあるのだという結論に至った。現生正定聚を考えるうえで、今ここにおいて阿弥陀仏の撰取不捨のはたらきを受けている、今ここにおいて救われているという視点を失ってはならない。このように結論づけて本稿を終えることとする。



註

- 1 『浄土真宗聖典（註釈版）』（以下、『註釈版』）二五一頁。
- 2 信楽峻磨『教行証文類講義（第六卷）信卷（三）』九七頁参照。
- 3 『註釈版』六八〇頁左訓。
- 4 『浄土真宗聖典七祖篇（註釈版）』（以下、『註釈版七祖篇』）二四一頁。
- 5 『註釈版七祖篇』二四一頁。
- 6 『註釈版七祖篇』二四一頁。
- 7 道綽の思想については、主に勸学寮『浄土三部経と七祖の教え』一七二〜一九五頁を参照した。
- 8 『註釈版』一一五頁。
- 9 『註釈版』三〇七頁。
- 10 星野元豊『講解教行信証 証の巻 真仏土の巻』一一〇六頁。
- 11 臨終来迎に関しては、玉木興慈「親鸞の「現生正定聚」考―臨終来迎否定に関連して―」『龍谷大學論集』四六二、二〇〇三年を参照した。
- 12 『註釈版』七三五頁。
- 13 勸学寮『親鸞聖人の教え』三〇二〜三〇四頁参照。
- 14 『註釈版』五六〇頁。
- 15 「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、至心発願してわが国に生ぜんと欲せん。寿終るときに臨んで、たとひ大衆と圍繞してその人の前に現ぜずは、正覚を取らじ。」（『註釈版』一八頁）
- 16 「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を聞きて、念をわが国に係け、もろもろの徳本を植ゑて、至心回向してわが国に生ぜんと欲せん。果遂せずは、正覚を取らじ。」（『註釈版』一八頁）
- 17 三定聚に関しては、主に黒田覚忍『聖典セミナー浄土和讃』九七〜百頁を参照した。
- 18 親鸞は、この「正定聚」に「往生すべき身とさだまるなり」と左訓をつけている。もともと「往生」と「成仏」は別の事態と考えられているが、親鸞はこの二つを一つの事態と考えていた。よって、もともと成仏決定の意味である正定聚に往生決定の左訓を付けたのである。
- 19 『註釈版』六七九頁。
- 20 『註釈版』七三五頁。
- 21 『註釈版』五七一頁。
- 22 『註釈版』五七一頁脚註。

- 2 3 『註釈版』四七七頁。
- 2 4 法然も『選択本願念仏集』において、「名号はこれ万徳の帰するところなり。しかればすなはち弥陀一仏のあらゆる四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、みなことごとく阿弥陀仏の名号のなかに撰在せり。」(『註釈版七祖篇』一二〇七頁)と具体的に述べていることも注目すべきであろう。
- 2 5 内藤知康『聖典セミナー一念多念文意』五四頁。
- 2 6 現生において正定聚を語った理由については、主に内藤知康『聖典セミナー一念多念文意』四一〜四五、五二〜五四頁を参照した。
- 2 7 『註釈版』八五二頁。
- 2 8 『註釈版』二六四頁。
- 2 9 『註釈版』五七三頁。
- 3 0 『註釈版』七五八頁。
- 3 1 詳しくは、玉木興慈「便同弥勒」「諸仏等同」についての一考察―第十七願との関連から―『真宗研究』四三、一九九九年参照。
- 3 2 『註釈版』八一頁。
- 3 3 勸学寮『親鸞聖人の教え』二九九頁参照。
- 3 4 『註釈版』一二七〜一二八頁。
- 3 5 藤原ワンドラ睦「親鸞教学における現生正定聚の意義―北米開教区における布教活動経験にもとづいて―」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三四、二〇一二年参照。
- 3 6 『註釈版七祖篇』一六頁。
- 3 7 『註釈版』一五三頁。
- 3 8 勸学寮『親鸞聖人の教え』三〇一頁参照。
- 3 9 『註釈版』二〇五頁。
- 4 0 『浄土真宗聖典全書Ⅰ』(以下、『聖典全書Ⅰ』)四三頁。
- 4 1 『註釈版』三〇八頁。
- 4 2 『聖典全書Ⅰ』三二二頁。
- 4 3 『註釈版』三〇八〜三〇九頁。
- 4 4 岡亮二『教行信証口述五十講 第三卷(信の卷下)』四六〜四七頁参照。
- 4 5 『註釈版』六八〇頁。

- 4 6 『聖典全書 I』二五頁。
- 4 7 『註釈版』六七九頁。
- 4 8 勸学寮『親鸞聖人の教え』二七八～二七九頁参照。
- 4 9 『聖典全書 I』五〇一頁。
- 5 0 『註釈版七祖篇』一一九頁。
- 5 1 『註釈版』三〇九頁。
- 5 2 『註釈版』六八一頁。
- 5 3 星野元豊『講解教行信証 証の巻 真仏土の巻』一一三三頁～一一三四頁参照。
- 5 4 桐溪順忍『昭和仏教全集第八部(一) 親鸞はなにを説いたか』二四三頁。
- 5 5 『註釈版』六七八頁。
- 5 6 『註釈版』一三二頁。
- 5 7 梯實圓『精読・仏教の言葉 親鸞』二四〇頁。
- 5 8 『註釈版』四七三頁。
- 5 9 『註釈版』五七六頁。
- 6 0 『註釈版』二六六頁。
- 6 1 『註釈版』八三七頁。
- 6 2 『註釈版』八三七頁。
- 6 3 断つておくが、決して親鸞に浄土往生が決定したよろこびがなかったと述べたいわけではない。第一節で考察したように、『一念多念文意』において「かねてさきよりよろこぶところなり」(『註釈版』六七八頁)と示されていることを考えると、親鸞に浄土往生が決定したよろこびがあったことは確かである。しかし、今ここにおいて救われているという視点も持たなければ、現生正定聚の理解としては不十分であることを本稿において述べたかったのである。

本 禁 蔵

参考文献

書籍

- 岡亮二『教行信証口述五十講 第三卷(信の巻下)』教育新潮社、一九九七年
- 岡亮二『教行信証口述五十講 第四卷(証の巻)』教育新潮社、二〇〇四年
- 梯實圓『精読・仏教の言葉 親鸞』大法輪閣、一九九九年
- 勸学寮編『浄土三部経と七祖の教え』本願寺出版社、二〇〇八年
- 勸学寮編『親鸞聖人の教え』本願寺出版社、二〇一七年
- 桐溪順忍『昭和仏教全集第八部(一)親鸞はなにを説いたか』教育新潮社、一九六四年
- 黒田覚忍『聖典セミナー浄土和讃』本願寺出版社、一九九七年
- 信楽峻麿『教行証文類講義(第六卷)信卷(三)』法蔵館、二〇〇四年
- 白川晴顕『浄土和讃を読む』本願寺出版社、一九九九年
- 高木昭良『教行信証の意識と解説』永田文昌堂、一九八三年
- 内藤知康『聖典セミナー一念多念文意』本願寺出版社、二〇一四年
- 星野元豊『講解教行信証 信の巻』法蔵館、一九九四年
- 星野元豊『講解教行信証 証の巻 真仏土の巻』法蔵館、一九九四年
- 本多弘之『一念多念文意講讀』法蔵館、二〇一二年



村上速水『親鸞教義とその背景』永田文昌堂、一九八七年  
森田真円『はじめての親鸞さま』本願寺出版社、二〇一二年  
山下秀智『教行信証の世界〔中〕』北樹出版、一九八四年  
靈山勝海『聖典セミナー親鸞聖人御消息』本願寺出版社、二〇〇六年

## 論文

浅井成海「親鸞の現世利益観」『真宗学』一〇五・一〇六、二〇〇二年

玉木興慈「便同弥勒」「諸仏等同」についての一考察―第十七願との関連から―『真宗研究』四三、一九九九年

玉木興慈「親鸞の「現生正定聚」考―臨終来迎否定に関連して―」『龍谷大學論集』四六二、二〇〇三年

玉木興慈「親鸞思想における「常行大悲」の意味」『真宗学』一〇九・一一〇、二〇〇四年

鍋島直樹「親鸞とその門弟における死の超克―乗信・有阿弥陀仏・随信への書簡等にみる親鸞思想の円熟―」『真宗学』九七・九八、一九九八年

藤原ワンドラ睦「親鸞教学における現生正定聚の意義―北米開教区における布教活動経験にもとづいて―」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三四、二〇一二年

前田壽雄「親鸞における正定聚論」『人間学研究論集』二、二〇一二年

村上速水「親鸞のよろこび―現生正定聚の理解について―」『龍谷大學論集』四〇〇・四〇一、一九七三年  
村上速水「現生正定聚の理解」『龍谷教学』二三三、一九八八年

# コピ―廠禁